24 《PELEUS and THETIS》

25 《鑢中寶鼎》

春景》に続く「申（SARGE）二六九番」〔図22〕であり、今ひとつの「Rijiki mens」（豊かな人の意か）と題字のあるのは「申二七四番」〔図23〕である。残念ながら典拠となる舶来本を知らない。請教示。

今一点、春燈斎風と思しき図版に「PELEUS and THETIS」と題された銅版がある〔図24〕。ギリシャ神話のペレウスとその妻・海の女神テティスを描いている。絡み合うように細い線と点苔を駆使し、原画の立体表現に挑んでいる努力には恐れ入るが、江戸期の銅版技術の限界はここまでであった。前述の春燈斎の技法とはやや異なるものの、玄々堂のような堅さはない。

最後に支那趣味のマッチラベルのような《鑢中寶鼎》を掲載しておく。愛すべき小品（六〇×八八ミリ）であるが、漢文は仙丹のような意味深長な内容である。款記はないが、制作者はおそらく春燈斎であろう。

百号を記念して春を届ける次第である。

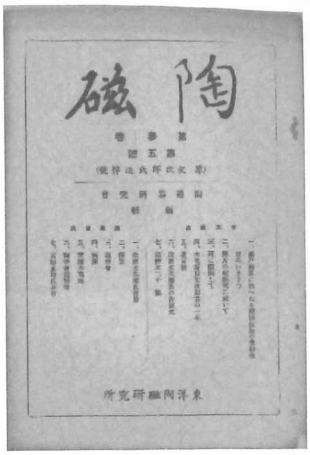
遺産探索とその継承への路
―原文次郎と陶磁器デザイン

森　仁史

本誌九十六号で愛知県商品陳列所長だった原文次郎（一八七〇―一九三一）〔図1〕に触れたが、彼自らは多くを語らず今では忘れられている。その業績は少なからず、今なお見返しておくべきだと感じ、改めて紹介したいと思う。

原の没後、『陶磁』第三巻第五号（東洋陶磁研究所、昭和六年九月）は全頁を挙げて追悼特集号〔図2〕とし、多くの知友の追悼文を収めているので、主にこれによりつつその生涯を振り返っておこう。原は明治三年三月十日金沢藩漢学者原規矩郎の長男として金沢に生まれ、妹が二人いた。父は加賀八家の一つ横山家に仕えていたようだ。十三歳で上京し、湯島にあった前田家の寮に入った。身長五尺そこそこと体格に恵まれず、希望した海軍にも一高にも入れなかったものの、東京高等商業学校に入学した。高商在学中はボート部選手として活躍し、野球、テニス、水泳、器械体操とスポーツは万能

1　原文次郎肖像



2 『陶磁』第3巻第5号、昭和6年9月

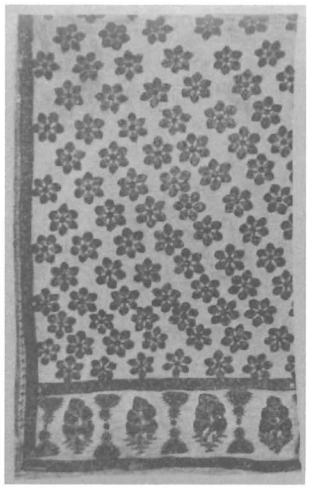
時代からわけても英語がよくできたようで、後年自らを「日本語のできるコスモポリタン」と任じていた。一八九三年に卒業し、翌年大阪商業学校教員となったが、二年後には横浜のスミス商会の番頭となった。下宿に学生を同居させ、犬を一〇匹も飼って、狩猟を楽しんだという。横浜支店支配人だった西園寺とはこの時期こうした趣味で交友が深まった。西園寺は原が英語がよくできたため、他から便利に使われてしまったと惜しんでいる。スミス商会は破産し原はその後処理を済ませ、一九〇二年帝国貿易に入ったが、四年後には三重洋行支配人として四日市に赴任した。しかし、数年で三重洋行も辞めて、日露戦後関東州民政署の嘱託となり満洲資源調査に従事した。〇九年にはアメリカ、カナダを視察し、翌年に大阪の吉川商店に勤務したが、妻を亡くして失意のなかで辞職し金沢に帰った。

この帰郷は旧主にあたる横山章（一八七四―一九三八）が一九一一年商工会議所会頭に就任するにあたって、協力を求めたからと思われ、一九一二―一八年に金沢商工会議所書記長を務め、一二年に再婚した。横山章は尾小屋鉱山で成功を収めた横山隆興（本誌五十一号参照）の長男であり、一九〇九年横山鉱業部社長となり、この時期は一四年衆議院議員に当選、一六年には金沢高等工業学校設立費として十万円を寄付し、一八年に貴族院議員に選任されるといった活躍ぶりであったから、彼一人で地元商工界をけん引する余裕はなかったのであろう。原は在任中、一九一七年十―十一月に横山ら金沢の財界人と朝鮮、北支、上海を視察し、観光名所を巡るだけでなく軍閥首領や現地日本企業経営者らと懇談している。

原はその後一九一八年吉川商店インド支店監督、二〇年七月帝国綿花ボンベイ支店長となった。この時期にインド、ペルシャの古裂、刺繍、更紗や古陶磁器、仏像、銅器、武具、石彫など工芸品の収集に勤しんだ。二年後七月に帰国して、富山出身の鶴見左右雄農商務省次官に景気浮揚策の調査を依頼され、商務局嘱託となって調査、立案に従事した。鶴見は一九二一年愛知県知事に任命された川口彦治から愛知県商品陳列所長の人選の相談を受けたとき、その能力を買っていた原を推薦し、二三年四月同所長となって名古屋に赴任した。この時の年俸五千円は知事と同額だと評判となった。原は宴会を嫌い、役人の慰労出張を退けた。講演を依頼されると、話すのと同一の原稿を完成させて臨み、速記がいらなかったという。普段は渋い和装が好みで袴着用を欠かさなかったが、外出時は派手な洋装に必ずネクタイを着用した。夏になると褐色のヘルメットをかぶりサングラスに薄いシャツ、ショーツ姿だった。不精髭が嫌いで、アメリカ土産に安全剃刀を部下に配るほどだった。雨の日にはレインコートを着用し傘を差さなかった。さぞや名古屋の官界では異色な存在だったことだろう。

着任早々の一九二三年十二月に瀬戸陶磁器工商同業組合の求めに応じて、「陶祖春慶翁の入宋に就て」、翌年「再び春慶翁の事績と其作品

に就て」と題して講演をしている。原はR・ホブソン『中国陶磁器』（一九一五）に基づき、高橋箒庵や田内梅軒を参照して加藤四郎左衛門作と伝わる作品が中国のどの地域の技法に学んでいたかを検討し、伝世品は朝鮮の技法に近いものもあると指摘した。着任以前から近代数寄者の陶磁器評価や西欧の東洋陶磁研究に通じていたようだ。翌年三月愛知県産見本品を携えて、台湾、厦門、雲南、インドシナ、シャム、シンガポール、バタビヤなどに出張し参考品を収集し、七月帰国した。八月にそれら陶磁器、織物、刺繍、玩具、銅鉄器などの展覧会〔図3、4〕を催した。この夏に奥田誠一（一八八三―一九五五）が「陶磁器は例へ一工芸に過ぎぬとは云へ、…之が過去に於ける進展の跡を探り、現在を眺め将来を示差する事は、…東洋人なる我々の仕事でなければならぬ。」（『陶磁』一―一）として創設した東洋陶磁研究所の発起人の一人になっている。一九二六年九―十二月にはフィラデルフィア万博及び県産品輸出状況視察のため、万博後ニューヨーク、ボストン、シカゴ、ロサンジェルス、サンフランシスコを訪れた。シカゴではフィールド博物館学芸員B・ラウファー（一八七四―一九三四）に奥田編『東洋陶磁集成』（辻本写真工芸社）を携えて訪問し、彼の収集品の一部だった東南アジア陶器をめぐって互いの見解をたたかわせて話が尽きず、二日間にわたって議論、検討を続けた。（『陶磁』一―一、一九二七年十一月）このほか、インド、シャムへも出張した。



3・4 《インド刺繍壁掛》と《安南染付壺》（『愛知商工』第151号）

原の着任と同じ年七月に佐羽総太郎（未央庵）が名古屋に転勤し、高商の三年先輩だった佐羽と原の二人が発意し名古屋で焼物好きを集め、陶華会〔図5〕と称して、毎月一回の研究会を開くようになった。後藤幸三（一九二一年名鉄取締役）、高橋定一もこれに加わった。原は毎回陶華会会場の床飾りを準備し、会員の説明と批評を纏めて次回に朗読して披露するほどの熱の入れようだった。中京地区でも一九二二年ころ益田孝に連なる敬和会がつくられ、佐羽や後藤も招かれている。原自身も富田重助の茶会に参加〔図6〕してもいるが、茶席の活動には深入りしていない。彼は今に至るまでに陶磁器制作でどんな優れた作例があったのか、その水準と到達点は残されたどんな作品から知りうるのかを確かめることがより重要だと感じていた。また、所長と

5　陶華会会員（『陶磁』3-5所収）

6　富田重吉茶会（右端が原、同右）

しては、それらから現在の陶工が何を学べるかが課題だと意識していたに違いない。

こうして原は着任以降愛知の陶磁器への見識を一年余りのうちにより深めていった。売り立て目録などから図版を集めた「陶片」と名付けたスクラップ帳が三十八冊にも及んだのをみてもその熱心さと徹底ぶりが窺える。この時期、まだ日本の陶磁器についての歴史記述としては大西林五郎『日本陶器全書』（松山堂、一九一三年）くらいで、これは裏印を収めた陶工伝の集積であり、図版を使った作品集は公刊されていなかった。このため、研究には個人で限られた情報源から集めるほかはなかったのであった。原は小野賢一郎が進めていた『陶器全集』三〇冊（民友社～全集刊行会、一九三一―三七年）の編集に進んでこのスクラップ帳を提供しており、自らの調査を独占するのではなく研究推進へ捧げようとした。また積極的な実践家らしく、この地域で最初に油皿や石皿を収集し始め、それは一〇〇枚に及んだ。瀬戸など近郊の窯跡を訪ね歩き、研究資料として大小の破片を収集してもいる。佐羽から影響されたのか原も自宅庭に窯を築き、楽焼にも取り組んだ。

原は一九二三―二八年に五回開催した愛知県工芸展の開催に際して、『愛知商工』154号で次のように呼びかけている。

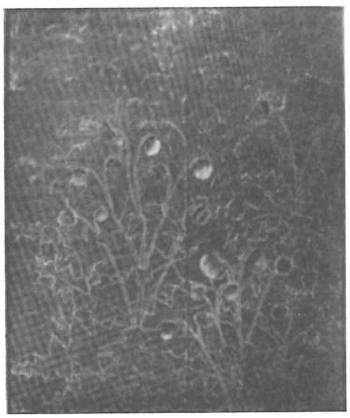
芸術の民衆化、之がそも〳〵の根本主義である。

原料に於て天然に恵まれて居らぬ我日本では、技術に頼つて国本を培ふほかに、急迫せる目下の国民経済を建て直すの途はありそうに思はれぬ。

応用芸術、民衆の生活に即する方面に芸術を応用することは古来日本国民の長所であつた。

原が目指したのはまず地場産業の立て直しであった。この頃第一次世界大戦後の不況が陶磁器業界に大きな打撃を与えていたので、原は第一に輸出貿易品の改良と生産調整とを指示した。産業としての工芸が芸術的魅力を獲得することを目指した。茶陶をつくれば上等な窯屋になれるという目先の方策を退けようとした。しかも、それは日本芸術の長所であるがゆえに可能だと主張した。工芸展出品は第一回は県下に限ったが三回からは「県内外及外国産工芸品」とし地域を限定せず、また販売可能なことを義務付けた。原と奥田誠一の審査によって選ばれた作品〔図7、8〕にはその志向が反映されているように思える。加藤唐九郎が原を「小堀遠州以後初めての、斯道の先覚者であり、指導者であり、鑑賞者」とまで讃えているのはこのような原の視点のゆえだったのではないか。

原が着任すると、瀬戸陶磁工商同業組合技手だった加藤一（一九〇〇―六八）は「一度翁を知つて以来随分頻繁に出入りもするやうになり、比較的短い間に不思議な位親密に」なり、土師萌の号を原から与えられたと言われている〔図9〕。原は「殊に萌えんとする若き作家の



8　藤井くわ《麻地蠟纈富士薊二枚折屏風》1926年

7　近藤悠三《呉須草花模様珈琲具》1926年

9　加藤土師萌《原さんの御顔》
（『木兎庵遺稿』所収）

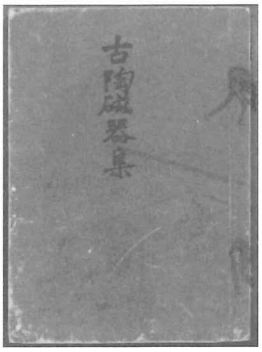
指導奨励には大いに力を入れた」が、「作家の慢心を慮つてか蔭で褒めるとも面前では決して之を褒めなかつた」という指導ぶりだったという。加藤のほか小森忍、加藤菁山、矢野陶々、加藤春二、河本礫亭らが厳しく指導を受けた。瀬戸の作家がつくった陶均会も原の熱心な指導を受け、一九二四年第一回陶均会試作展（図10、11）にその成果の一端が伺える。ただ、加藤が二六年九月には岐阜県陶磁器試験場に転任したこともあり、同会は「翁の引退と同時に自然帳滅の形となつたことは洵に遺憾千万である。」と吐露している。

また一九二七年頃に、原は京都で柳宗悦、河井寛次郎、浜田庄司らと何度か懇談していたようで、安堵村に富本を訪ね作品を購入してもいる。同年刊行された『富本憲吉模様集』を三冊購入したいと富本に依頼する手紙が残っている。一冊は商品陳列所に、もう一冊は友人に、さらに一冊は自宅のためと言い、その理由は自分は怒りっぽい人間だが、「あの本を見れば忽ち平和の心に立ち返るを得るを実験したる」がためだと書き送っている。

名古屋在住は原にとって居心地がよかったらしく、商工会議所特別議員、名古屋ロータリー倶楽部名誉書記としても縦横の活動を展開した。しかし、その高給が一九二七年に赴任した小幡豊治知事との軋轢を生んだらしく、「陳列所を終生の事業として来りたるもの」と考えていたが、知事の思惑を慮って二八年五月辞表を提出した。地元業界の反対もあって紆余曲折したが九月に受理された。このとき原は尾張の古陶磁の大規模な展覧会を準備していて、退職後の十月十四日―十一月二十日に愛知県産古陶瓷展として商品陳列所で開催された。すでに退職後であったために、原が構想した総ての作品を集めることはできなかったようだが、会場には東京と名古屋近在の所蔵家一一〇人から約八〇〇点余りの作品（図12）が並べられ、前例のない規模になった。こうした展覧会はこれが初めてではなく、一九一六年頃京都商品陳列所は収集した逸品を三回にわたって展示し、日本国内各地の陶磁器を収めた図録（図13）を刊行した。名古屋でも翌一七年九―十月に愛知県

10　加藤土師萌《唐子彫紋様水差》
11　矢野陶々《黄紋麒麟文様果物盛》
（『愛知商工』第一五二号）

12　《瀬戸古窯渦文壺》
（山村耕花蔵）



13　京都商品陳列所編
『古陶磁器集』芸艸堂、
大正５年

14　名古屋史談会編『古陶集』岩田写真館、大正7年

まり注目を引かなったようだ。陶磁器研究は明治初期の輸出の成功のなかで、黒川真頼、鹽田眞らによる伝承の精査による制作の実態把握から始まった。それとは別に一九〇〇年前後に始まった益田孝ら近代数寄者の個人による茶の湯趣味の復活はかつての銘品の評価を継承させた。その後大河内正敏ら陶磁器研究会が伝承から離れて陶磁器を造形的、美術的に評価しようとする新しい流れを作った。一八八〇年代のジャポニスム衰退によって産業振興の分野では過去との結節が希薄な時期があったが、一九一〇―二〇年代にデザイン活動のソースとして古陶磁を同時代の感覚から捉え直そうとする第四の流れが形成され、原の試みはここに属する。

愛知県産古陶瓷展の一部が二年後『尾張の古陶』（後述）として刊行された。趣意書のなかで、原はなぜ過去の遺品をこの時期に展示するのか、それをどう生かすべきなのかについて極めて具体的に説明している。

…陶工の中には、よい手法や伝統の貴重なる所以が、よく解つて居らず、随つて、漫然と、手当り次第にそれらを応用し、濫造し、其結果、薬に中毒するもののあるやうに、あたら材料や手法が、単に其効果を発揮せずに終るばかりでなく、却つて見るもいやな感じのするものが出来上る傾向のないではないのは、唯惜しいことだとばかり言つては居られませぬ。

…古名匠の苦心の結晶たる名器…唯それらを其儘模倣したのでは、形骸のみ整つて精神のないものとなるばかりである。それらの立派な作品の裡に籠つてゐる名工の気魄神髄を摑み、その手法なり意匠なりを能々嚙み締め、それから来る霊感に刺激されて、これに陶工各自の個性が加はり、全く模倣の域を脱して、こゝに初めて新しい品となつて現はれ、刻々変転し、時代につれて進みつゝ、循環的に還元する流行や嗜好に順応する品となつて出て来る。斯ういふ風に活用するところに参考品たる価値が存在し、…

一九三〇年十一月に小森忍は和田三造の示唆から西洋食器の日本化、東洋化に取り組んだ。すでにこうした試みは一九二二年以降陶磁器試験所で着手され〔図15〕ていて、三〇年秋の窯業技術官会議で平野耕輔所長が全国の試験場に提唱したところだったが、瀬戸で小森が翌年その成果を発表している背景には、原の訴えた伝統の再学習への導きがあったことは見落とせない。一九一七―二八年まで大連で中国古陶磁の研究吸収に邁進し、帰国後は建築陶器の開発に注力していた小森が原との接触のなかで日本の伝統研究へ急転身したことを見逃すべきではない。

原は退職後には名古屋高等商業学校講師や名古屋新聞産業相談所顧問などを務めた。一九三〇年三月十日に名古屋ホテルに家族、実家の

15　陶磁器試験所《硬質陶器肉皿》1922年

係累が集まって、還暦晩餐会を開いた。しかし、八月名古屋医科大学病院で胃潰瘍治療中に胃癌が見つかった。しかし、原は直ぐには寿命が尽きるとは考えず、コレクションのために窮屈な思いをしていた自宅に十坪余り増築し、丸太造りの山小屋風な書斎、寝室を大工と相談しながら設計し、年明けに完成させた。木兎庵と名付けた書斎〔図16〕を見ると、その多様な収集品で溢れ、原の古美術収集愛好熱がいかほどであったかが伺える。三月から治療を始めた時には癌は肝臓にも転移していると分かった。自宅で療養を続けたものの、六月二十三日六十一歳にして名古屋市中区西日置町の自宅で死去した。遺言により葬儀は行わず、二十九日市内東区の奉安殿護国院で知友によって追悼会が営まれた。

翌月、名古屋美術倶楽部で陶磁器を中心とする遺愛品が展示販売された。「拙者蒐集工芸品中古裂類は東京奥田誠一氏に相談し、なるべく一まとめとして売つて仕舞うべし」との遺言に従ったようである。原は晩年瀬戸陶磁器史の完成を願っていたが、残念ながら果たされずに終わった。

16　木兎庵書斎（『陶磁』3-5所収）

＊　＊

原が書き残したものからその主張を選び出してみると以下のようなところであり、中途で倒れた彼が見ようとした処や目指そうとしたものが理解できよう。

『インキヨノメタマ』（明治印刷、大正九年）

原の最初の著作である。冒頭に表紙を吸い取り紙にしたのは読まれなくても役に立つようにしたと記している。その主張にはいくらかの自信があったはずだが、他に強いようとしたくなかったのであろうか。冒頭の「西へ西へ」は一九一〇年二月からのヨーロッパ訪問の随想であるほかは、金沢在任中の執筆である。大半は商工会議所業務の傍ら地元紙などの求めに応じて発表したもののようである。

中国視察の途次でアメリカが中国に立派な教育施設を設立し、卒業生をアメリカに留学させているのを見て、「帝国政府が今少しく思ひ切つて支那に金を入れて欲しい事に候。特に教育方面に然か願上度候。」と主張し、「人情として日本鼻屓」となる中国人留学生を育てるため、政府だけでなく「国民一同気を揃へて掛らねば出来不申候。」と述べている。まさに明治維新期に自己形成を果たし、海外体験を積んだ原ならではのあるべきアジア友好への具体的な見解であり、二十世紀の日本の進運の根底に関わる提言のように思われるが、この二十年後の日本政府の対外進出はこれとは真逆の途を選んだのではなかったか。

原は英語が堪能だったから、とくにイギリスにおける東洋陶磁の研究を参照したし、その成果から研究を始めた。しかし、インド滞在の経験を踏まえて、「我等日本人は欧州人よりや遙かに地の利を得てる。…だから自分の考へぢや国家的には亡んでしまつてる印度民族の遺して逝つた芸術、それを研究してやつて千秋の生命を伝へてやるのは、吾人の責任だとさへ思ふ。」（田代三郎「原さんの追想」『陶磁』三―五）と語ったという。アジア文化をアジアの視点から学び、伝えようとすることに原は近代日本の責務を感じたようだ。これは九鬼隆一が「支那印

度に於ける数千年来の文華は、寧ろ其の本国に余葩を留むるもの少くして、却て我日本帝国に於て遺芳を放つもの多し。」と語る思い上ったナショナリズムに較べると身の程をわきまえた見解とすべきではないか。見せかけの大東亜共栄圏に至る路とは肌合いが違うように思える。

＊　＊　＊

・「安南焼に就て」『彩壺会講演録』（彩壺会、昭和二年）

大正十五年九月の講演を印刷したもので、同日の中尾万三「南京法恩寺の陶塔」が合わせて収録されている。原の彩壺会講演はこれ一つである。原は安南＝ベトナムでの陶磁器製造は中国の技法が伝わった十一世紀以後と推論し、日本で安南と言われる伝世品（染付、絞り手、蜻蛉手）について釉薬、焼成方法などに基づき彼がハノイで集めた二十四、五点の作品を参照して解説している。ただ、安南青磁と言われる作品については、ベトナムには青磁はなかったはずだと主張している。この時期の日本では、インド滞在体験のある原くらいしかアジアの陶磁器について語れる人間はなかったのであろう。

一九一三年三月発足した陶磁器研究会会員の一部が三年程後にコレクターを中心に彩壺会を別に組織した。いずれも奥田誠一（一九一〇年東京帝大哲学科心理学専攻卒）が幹事を務めた。陶磁器研究会は学術的な陶磁器研究を志していた東京帝大工学部教授大河内正敏（本誌31号）が同文学部心理学教室助手奥田誠一らとともに「従来骨董的に賞翫されて居た陶磁器の趣味を、科学的に研究して行こう」として発足させたもので、会場を心理学教室とする東京帝大内の同人的な組織だった。「その頃の心理学教室には、心理学の応用方面に手をつけようと云う人が多く、松本亦太郎（一九〇三哲学科卒）先生の日本画の評論、菅原教三（ママ）（一九〇七心理学専攻卒）君の色彩の研究、上野直昭（一九〇八心理学専攻卒）君の芸術創作の研究、斎藤茂三郎君の建築…教室はいつも賑わっていた」（奥田誠一「古陶磁鑑賞の回顧」『日本美術工芸』第一六九号、一九五二年十一月、〔　〕内は著者補）ので、これを中心に会員を集めた。発足当初は十一名だったが、十八年六月までに会員は五十四名となった。会員には藤掛静也、板谷波山、黒田清輝、蜷川第一、岡田三郎助といった美術関係者のほか、関野貞、塚本靖、佐藤弘一、中條精一郎、岡田信一郎、田辺惇吉ら建築関係者が多かった。（『暹羅の陶磁器』陶磁器研究会、大正七年）この時には原は会員ではなかったが、もう少し後と思われる「陶磁器研究会入会のお勧め」という刷り物には幹事奥田誠一に続き、原文次郎、倉橋藤次郎、脇本十九郎、内藤堯宝が連記されている。ここには研究会事務所が東洋陶磁研究所内と記されている。

同会は一九二三年の関東大震災のため休会状態となり、二四年に奥田たちは東洋陶磁研究所を設立した。このとき、『陶磁』が創刊されたが、同誌は陶磁研究会編と記されている。研究所発起人は奥田のほか、原、中尾万三、辻本秀三郎、金上盛三らで、岩崎小弥太、横川民輔、山田三次郎、塩原又造、反町茂作が支援した。初め研究所は本郷区本郷の大塚工芸社内にあったが、三二年には日本橋区江戸橋通松慶ビルに移転し、『陶磁』編集主体となった。しかし、同研究所は戦災にあって、図書、参考資料を総て失い、その後振り返られることもなくなったが、彩壺会は富裕な会員の活動が華やかだったせいか、塩原、鴉南不出嶼らの回想がある。この経緯については木田拓也の研究論文（『東洋陶磁』第四二号）を参照されたい。

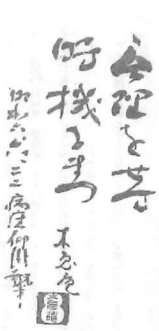
・『尾張の古陶』（万里閣書房、昭和五年）

前記の愛知県産の古陶瓷展の出品作のなかから、奥田誠一が百五十点余りを選んで写真撮影し、写真が原品の魅力を伝え難いものを省いた百十六点を収録した。収録作品は商品陳列所、瀬戸商工同業組合といった機関所蔵のほか、愛知からは関戸守彦、佐羽、佐橋谷三郎、白木周次郎、高木太助、渡辺長兵衛らの近代数寄者が網羅され、東京からは倉橋藤次郎、山村耕花らの所蔵品が含まれている。この時期としては類例のない愛知県産陶磁器の作品図版集だったためか、架蔵本を見ると一か月の間に六版を重ねている。

本書には原執筆の八編と奥田執筆の瀬戸陶磁器の概説が収録されている。原の論旨は古い作品の評価に留まるのではなく、それをこの時期の陶工がどう生かすべきかという観点が語られている。

吾人が陶祖春慶翁から学ぶべき点は、此等技術上の細節ではなくして、其絶倫なる勇気と、其飽くまで天職に忠なる真面目な態度と、而して、其作品に籠るところの驚くべき力とである。（「陶祖春慶翁の入宋に就て」）

随分際どいところまで技工を拵らへはするが拵らへ過ぎたという感じは起こさせぬ。幕末退廃期の芸術雰囲気の裡に在つて、毅然として清新健康力強い作品を出したことは、鑑賞の対照といふことと共に、使用価値に重きを置いてゐたことは、一つは瀬戸の伝統の力にも依らうが、主に春岱の個性が然らしめたものであらう。（「陶工瀬戸の春岱」）



17・18　『木兎庵遺稿』1932年と原長次郎「無理をせす時機を待つ」昭和6年6月22日

●原博編『木兎庵遺稿』（私家版、昭和七年）〔図17〕

原の一周忌に遺稿集が編纂発行された。表紙に原の収集した古裂を用いたので、一冊ごとに装幀が異なっている。長男規一は一九二二年美校図案科第一部卒業したが、二四年十一月に早世したので、次男博が編集にあたっている。

原は病床にあっても最期まで意識は確かだったようで、社友を務めていた名古屋新聞営業局長だった森一兵から送られた揮毫帳に筆をとった彼のモットーが収録されている〔図18〕。原が時機を待つことができたのは高商の人脈に依るところが大きかったように思えるが、とても死の二日前の筆跡とは思えない。また、さらにその翌日には胸を突かれるような遺文を残してもいる。

やゝ心地よき眠りからさめて、まだ日の揚がらぬ五時頃、北向の磨ガラスの上に五分ばかりのかげらうのやうな小虫、微動だにせず唯一つゐた清楚たつ黒紗の薄羽織如何にも薦たけたその姿、描かば、墨画にてもその翼線の一本一本を描き得べく、省かば一抹にてその全幅を写し出し得べけん名和昆虫研究所の標本ともなすべき景文略画の一つとも見得べし

かく考へつゝある時、生に脅威のかゝりゐるとも知らず、身に病ありとしも覚えず。

我ら凡人には見習うことの覚束ない清明な最期は誠にうらやましい限りだと感じた。

一寸

第百号　二〇二五年三月

第百号目次

百号を機に一寸追記補記
—橋口五葉と永井荷風、中村不折、小林勇と河野通勢—　岩切信一郎　1
時に抗いし者たち——私の小菩薩峠（54）
関東大震災　朝鮮人・中国人虐殺　大谷　芳久　9
大正・昭和戦前期中等学校の図画教員30
京都府（二）　金子　一夫　40
原撫松の日記　XIII
一九一二（明治四十五・大正元）年一月・三月～九月　丹尾　安典　55
銅版画の初春と春画　銅・石版画遺聞97　森　登　66
遺産探索とその継承への路
—原文次郎と陶磁器デザイン　森　仁史　73
『一寸』第一号～百号　執筆者別総目次　82

一寸百号おめでとう号　令和七巳年二〇二五年三月

百号を機に一寸追記補記

—橋口五葉と永井荷風、中村不折、小林勇と河野通勢—

岩切信一郎

「備えあれば患いなし」とは『書経』が出典らしい、ボーイスカウトでは「備えよ常に」がモットーだった。集書もそんなところで、「いざ」と言う時に図書館へ行っている暇など無いから、手許にあるのがベストと、そんな思いの先物買いである。何を目的で集書に励むのか、「研究」への未来や展望が定まって居るといいのだが、もう定年も振り返るとすでに後方の彼方、そんな我身に展望などあろうはずもない。毎週神保町へ古書を買いに出る。見つけた紙や紙束を「面白い」とひとりほくそ笑む。そんな話をすると、「趣味で良いじゃないか」と声がかかる。展望を持つということの「欲」は健康長寿にも良いらしい。今回は百号ということで、これまで書いたことの追記と、資料の増補である。

《橋口五葉と永井荷風の『すみだ川』》

五葉の装幀が気に入って依頼した一人が永井荷風であった。そもそも五葉と荷風は浮世絵研究が縁で知り合ったものらしい。荷風が二歳上であり留学から帰国して江戸文化、特に浮世絵に関心を強くしてい